

多良間島における「龕」の使用について

岸本 敬¹⁾

About Use of "Gan (a Palanquin Used for Ride on a Coffin)" in Taramajima Island

Takashi KISHIMOTO¹⁾

はじめに

妊娠・誕生・成人・恋愛・結婚・厄年・死など人の一生の重要な折り目には昔からさまざまな習俗儀礼がおこなわれてきたが、これを人生儀礼という。

しかし、戦後の社会や生活様式の変化した今日、伝統的な人生儀礼もすっかり変わってしまった。なかでも葬制に関しては、「風葬」から「火葬」への大きな変化に伴い、一部の地域をのぞいて「洗骨」習俗や洗骨した遺骨を納めるための大型の「厨子甕」が姿を消してしまった。また、「野辺送り」などの葬送儀礼とそのなかで使用する「龕」や「天蓋(ティンゲー)」をはじめとする葬具のほとんども見られなくなっている。ただ、古くからの儀礼や葬具が沖縄全域ですべて姿を消してしまっただけではなく、その伝統が根強く守られている地域も存在する。

2012年10月の聞き取り調査で、多良間島における龕の使用に関して新たな情報が得られ、さらに11月に調査を行った。本稿はこの多良間島における龕の使用に関する調査報告である。

I. 沖縄の葬制と龕について

沖縄の葬制の特色は、洗骨葬を伴う複葬で、「風葬」という葬法を採用してきたことにある。「風葬」とは、遺体を墓室内に一定期間おいてさらすことをいう。焼香がすむと、遺体は棺箱に納められ、ついで「龕」とよばれる朱塗りの輿に乗せられて墓まで運ばれた。龕の屋形・柱・戸などは組み立て式で、4面の壁板には仏画や蓮の絵が描かれており、普段は龕屋で保管されていた。沖縄島などでは一般的に、

前後各2人で担ぐが、八重山地方では8人で担いだ(名嘉真 1999)。

しかし、戦後になって、風葬から火葬への変化や車(霊柩車)の普及などに伴い、龕が使用されることは八重山諸島など一部の地域を除いてほとんどなくなっている。その八重山諸島の現在の龕の使用状況を、2010~2011年にかけて実際に話を伺うことができた2つの地域(i 与那国島 ii 竹富島)について簡単に触れてみたい。

i 与那国島

龕は祖内、比川、久部良の各集落でそれぞれ保管している。

少なくともなっているが、現在でも「風葬」そして「洗骨」が行われている。

島外の病院などで亡くなり火葬された遺骨についても、故人の家から墓までその遺骨を運ぶ「野辺送り」を行い、その葬具として従来の8人で担ぐ朱塗りの龕が使用されている。

祖内で現在使用されている龕と龕屋は、2009年に新調・新築された(写真1)。2008年の台風で破損したそれまでの龕は当博物館に収蔵されている(写真2)。

ii 竹富島

現在喜宝院蒐集館に保管・展示されている龕(合龕)が、「明治三十三年に新調された」と記述されている龕である(写真3)。

担ぎ手の確保が困難なこともあり、1964(昭和39)

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.

年、少人数でも対応可能なように、普通のリヤカーに簡単な装飾をしてリヤカー式の龕（霊柩車）として使用するようになった。狭い道を通って墓の前までいかないといけないということからもリヤカー式になった。

1970年代頃（？）からは、ほとんどの方が石垣島の病院で亡くなり、石垣島で火葬後に島で葬儀が行われるようになった（「野辺送り」は行わない）ので、龕を使用することはかなり少なくなっていた。

1980（昭和55）年、2代目の「リヤカー式龕（霊柩車）」を購入して使用するようになった。福岡の梅谷仏具店で製作されたもので保管場所も龕屋跡近くのコンクリート製の建物（写真4）内に、他の葬儀用具と一緒に保管されている。

「リヤカー式龕（霊柩車）」は、従来の龕が朱塗りの赤色なのに対して、全体的に茶色ぼい色をしている。前方に大きく張り出した屋根の形状や装飾など、現代の霊柩車に近いといえる（写真5・6）。

棺を入れる箱の部分の外寸は、おおまかであるが図2の通りである。

材質はアルミだと思われ、また従来の龕がその屋形・柱・戸などが組み立て式なのに対し、これは組み立て式ではなく、棺を出し入れするための観音開きの扉が後方についている（写真7）。

これら2つの例を考察すると、与那国島は、火葬された遺骨でも従来の8人で担ぐ龕に入れ、昔なが

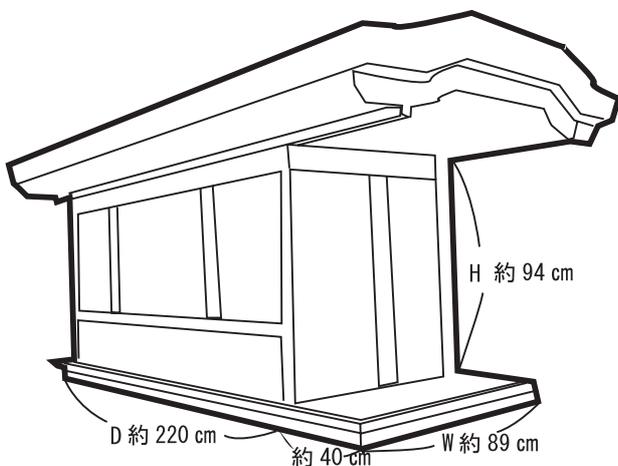


図2

らの「野辺送り」をするなど、従来の葬制を色濃く残しているといえる。また竹富島は、棺に入れた遺体を運ぶ龕（霊柩車）を使用することはかなり少なくなっているが、「担ぎ手をさがすのが大変」「自動車では墓の前までいけない」などの状況に対応して、その形状や運搬法を変化させながらも龕（霊柩車）で遺体を墓まで運ぶ習俗を存続させている貴重な例といえる。

II. 多良間島の概要

宮古島と石垣島の間位置する多良間島は、東方にある宮古島との距離は約67 km、西方にある石垣島との距離は約35 km に位置している（図1）。面積約19.75 km²、東西約6 km、南北約4.3 kmのほぼ楕円形をした島で、沖縄県の島で11番目の大きさである。

現在の行政区分は、沖縄県宮古郡多良間村で、多良間島の北方8 km に位置する面積2.153 km²のさつまいもの形をした水納島との2島からなっている。土質は砂質壤土で、島の北西に34 m ほどの丘があるのみで、ほかはほとんど平坦で河川はない。島の周囲は砂浜に囲まれ、サンゴ礁が発達している。さとうきびを中心に野菜、葉たばこ等の農作物が栽培されており、特に黒糖では単位面積あたりの収穫量が沖縄県内で最多となっている。近年には、畜産業も草地開発事業の実施や、セリ市場の開設で肉用牛の生産が盛んに行われている。人口1281人、総世帯数532世帯（2012年10月末現在）を数え、過疎化が進んでいる。

「たらま」という名称はかなり古くから使われていたようであるが、その起源ははっきりしない。1479年の朝鮮人漂流談記録（『李朝実録』）には「他羅馬」または「脱羅麻」、程順則の『指南広義』（1808年）には「達喇麻」とある。琉球王府時代には、



図1

平良、砂川、下地の3間切のいずれにも属さず、宮古の特別行政区におかれた。また、八重山から宮古の蔵元への連絡事務は、多良間島を経由するのがならわしであり、沖縄島と宮古、八重山地域を結ぶ海上交通の要衝であった。

集落は島の西北寄りにあり、字仲筋と塩川の集落からなっている。集落やその周辺を含め、全体的に緑の多い島であるが、そのほとんどは「抱護林^{*1}」と呼ばれる人為によるものである。島には、御嶽が5カ所、神社が1カ所あり、それらを中心に折々の行事や祭祀が旧暦で行われている。なかでも旧暦4月か5月に行われる「スツウブナカ」や旧暦8月に行われる「八月踊り」は有名で、「八月踊り」は県内で初の国の重要無形民俗文化財として指定され、現在も盛大に催されている。

交通機関は、宮古島まで所要時間約20分の小型飛行機が1日2往復、所要時間約2時間のフェリーが1日1往復運航している。

Ⅲ. 多良間島における「龕」の使用について

多良間島における「龕」の使用について、『ふるさと 在沖多良間郷友会20周年記念誌』（在沖多良間郷友会編 1977）に次のような記述が見られる。

「…明治初年島民の要望によりガンと天蓋（フツプラカ）の大を造ったが重過ぎたので更に二組を造らせ、塩川村、仲筋村の両村で士族、平民別に共用していた。」

「その後仲筋村は、塩川村と別に二組造り士族平民別に使用する計画をしたが予算の都合で一組だけ出来た。これは故大宜見春良さんの父大宜見春納さんが明治三十八年みの年に造ったものである。天蓋フツプラカともことし七十一年目のヨワイを送っている。」

「仲筋村と共用していた塩川のガンはこわれたので大木区の崇原春卓さんがつくられた 年代不詳このガンが昭和三年原国正松さんが新品につくり替えるまで利用された。現在塩川字の使用中のガンは原国正松さんの心魂こめた作である。」

これらの記述から多良間島で龕を使用し始めたのは明治初（1867）年頃であり、仲筋村には明治三十八（1905）年の巳（み）年に製作された龕が、塩川村には昭和三（1928）年に製作された龕があったこ

とがわかる。また、今年（2012）の11月に現地で聞き取り調査などを行った結果をまとめると次のようになる。

明治三十八（1905）年に製作された仲筋村の龕が、現在「ふるさと民俗学習館」に収蔵・展示されている龕である（写真8）。また、普段その龕が納められていた龕屋の跡が現在も残っている（写真9）。

現在でも昔ながらの葬列を組んでの「野辺送り」や棺に入った遺体をそのまま墓に納める「風葬」を行っており、列の順序や葬具などもほとんど変わっていない。火葬された場合でも、龕とフツプラカ（天蓋）を使わない以外は同様である。この「野辺送り」の順列について、『村誌たらま島 孤島の民俗と歴史』（多良間村誌編纂委員会編 1973：282頁）に次のように記されている。

- 1、たいまつを持つ人（墓地に案内する人）で五、六〇才以上の男）
- 2、草履、帽子を棒の先につっかけて持つ人（二人）
- 3、四流旗^{*2}を持つ人（四人）
- 4、会葬者（男）
- 5、天がいを持つ人（二人）
- 6、マイジユク^{*3}を持つ人（二人）
- 7、喪主を先頭に近親者
- 8、名旗を持つ人（一人）
- 9、ガンをかつぐ人（四人）^{*4}
- 10、家族（女）に続いて女性会葬者
- 11、供え物（お茶、タバコ等）をのせた台を持つ人（一人）
- 12、石灰や土を持つ人（二人）（石灰や土は墓の入り口を閉じるとき使う）

沖縄島など多くの地域と同様に、龕は墓に到着するまで地面に下ろしてはいけなるとされていたので担ぐのはきつかった。

フツプラカも沖縄島のティンゲーと同様に恐れられていて、あまり持ちたがらなかった。

島で亡くなった場合、その集落で役割を分担して棺や旗などの葬具をしつらえる。高齢者のいる家庭では、前もって宮古島の材木屋から棺用の板を買っておいてある場合が多い。四流旗などの旗を作るための白布もスーパーなどで売っている。

宮古島の病院で亡くなった場合も、本人の遺言や親類、友人などの「最後に顔を見てからお別れしたい」という要望が強く、火葬されることは少ない。宮古島の葬儀屋に棺を準備してもらい、その棺に遺体を入れて、船や飛行機で島まで運ぶ。遺体の到着する日に合わせて四流旗などの葬具の準備を進めておき、その日のうちに遺体を墓に納めるまでの葬儀を行う。

次の死者が出た時に墓口を開け、その前に納めた遺体の棺などを取り出し、墓庭で焼いたりするが、沖縄島などで行われていた「洗骨」は行わない(戦前は行っていたという話もあるがはっきりしない)。遺体の骨は厨子甕などの納骨器に入れることも基本的にはなく、奥のほうへまとめるだけである。よって沖縄島の墓の内部に見られるようなタナ(棚)もない。

1980年(昭和55)年、4人で担いだ龕を墓まで運ぶのは道も悪く危険だということや、担ぎ手を確保するのが困難になったという理由から、4輪(車両)式の龕(写真10)を自動車で牽引するようになった。多良間村が宮古島の業者(?)に発注して制作したと思うが、はっきりしたことはわからない。

4輪(車両)式龕は、普段は塩川の龕屋跡に建てられたコンクリート製の建物(龕屋)(写真11)内に、フツプラカ(天蓋)と一緒に保管し、仲筋と塩川で共用している。

与那国島や竹富島では、島外の石垣島などで亡くなった場合、ほとんどが火葬されるということであった。それに対し、多良間島では、現在も宮古島で亡くなった場合でも、遺体を火葬することなく、船や飛行機で島まで運び、墓に「風葬」する習俗が続いていることは驚きであった。また、龕を担ぐ際の危険性や人の確保の問題などから、従来の担ぐ形式から自動車に連結した龕(車両式龕)を使うという形式の変化は、竹富島と同様に、沖縄における葬制の変化をあらわす貴重な事例といえる。

IV. 4輪(車両)式龕の概要

i 外見

形状や朱塗りの赤色など従来の龕(「ふるさと

民俗学習館」に収蔵・展示されている龕)と同様である。

ii 外寸

棺を入れる箱の部分の外寸は、おおまかであるが図3の通りである。また、表1のように従来の龕と比較すると、一回り大きくなっていることがわかる。

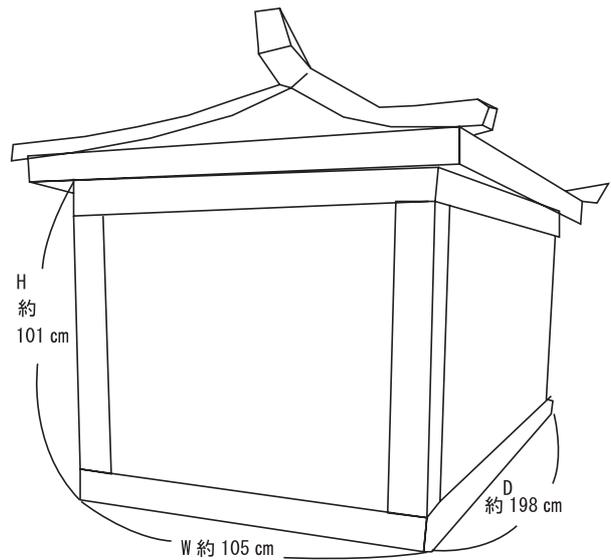


図3

	従来の龕 (cm)	車両式龕 (cm)
幅 (W)	67	105
奥行 (D)	138	198
高さ (H)	80	101

表1

iii 材質・構造

材質は木製で、内部の骨組みもしっかりとした造り(写真12)で、重量もかなりありそうであった。また従来の龕が屋形・柱・戸などが組み立て式なのに対し、これは組み立て式ではなく、棺を出し入れするための観音開きの扉が後方についている(写真13)。

龕を載せている車両部分は鉄製で、車輪部分な

どは自動車の足回り部分とほぼ同じ構造になっているようであった(写真14・15)。前方には自動車に連結するための鉄製の金具がついている(写真16)。

iv 運搬法

棺は後方の観音開きの扉から出し入れし、前方にある鉄製の器具を自動車に連結してゆっくりと移動する。

V. おわりに

現在も多良間島の80歳以上になる高齢者の方々は、火葬されると「熱い」「痛い」ので「火葬にはするな」と言っている方がほとんどのようである。ただ、70～60代の方々からはそのような意識も少なくなっており、今後は火葬されることも増えてくるだろうということであった。その場合、現在使用されている龕(4輪式龕)が、製作から30年以上経過していることから、龕を使用しての葬送儀礼がどのように変化していくかも興味深いものがある。

さらにもう一つ簡単な調査を行った黒島の例を挙げると、黒島でも現在は竹富島同様に、石垣島の病院で亡くなる方がほとんどで、火葬した遺骨を墓に納めるようになっている。しかし、戦後しばらく(50年ほど前)までは龕を使用しての葬送と「風葬」および「洗骨」を行っていたが、龕の老朽化などもあり、それ以後は普段農作業などで使う「荷馬車」などで遺体を入れた棺を墓まで運ぶようになっていたということであった。新たに龕を造ろうなどという話も特になく、それまで使用していた龕や龕屋も時間の経過とともに自然に朽ちていったらうということで、龕屋跡へも案内してもらったが、集落のはずれの藪の中で、場所をはっきり特定するまでもいかなかった(予備的な短時間の調査でもあったため)。与那国島や竹富島、多良間島などと比較すると、龕を使用しての葬送儀礼に対するこだわりがあまりないという印象であった。

黒島を含め4島について見ただけでも、戦後における葬制の変容の違いが見てとれ、特に龕の使用の有無、龕の形態の変化などにそれぞれの違いが見られる。他の沖縄島周辺離島や宮古・八重山の島々ではどのような状況になっているか調査を進めていくことによって、新たな事例を確認することが期待で

きる。機会があれば、その一部分でも稿をあらためて言及したい。

小稿をまとめるにあたり、上勢頭芳徳、上勢頭同子、富盛玄三、垣花昇一の諸氏にはさまざまにご教示、ご援助いただいた。厚く御礼申し上げます。

【脚注】

- * 1 蔡温(1682～1761)の林業政策により、各島々の集落や農地を、台風や潮風から守るためにつくられた林。多良間島仲筋のトカバナ山から塩川の白嶺山まで、集落を取り囲むように幅10mから15mの林がおよそ1.8kmにわたって続いている。樹高6～7mのフクギの大木(胸高直径20～50cm)を主体に、テリハボク、デイゴ、モクダチバナ、イヌマキなどが植えられている。多良間島の抱護林は、往時の形態を残している唯一の抱護林といわれ、県の天然記念物に指定されている。
- * 2 四枚の甲旗で、反物を六、七尺ほどに切って、それぞれ次のような文字を書く。(イ)佛諸行無常、(ロ)法是生滅法、(ハ)僧生滅々己、(ニ)宝寂滅為楽。(多良間村誌編纂委員会編1973:281頁)
- * 3 墓前に置く台のことで、マイジユクは「前机」の意であろう。位牌や花、香炉などを置く。(多良間村誌編纂委員会編前掲:280頁)
- * 4 『多良間村史 第四巻資料編3(民俗)』(多良間村史編集委員会編1993)では、「ガンをかつぐ人(四人) 現在は車」というように下線部が追記されており、1980(昭和55)年に変化していることが裏付けられる。

【参考文献】

- 上勢頭亨. 1979. 『竹富島誌 歌謡・芸能篇』法政大学出版局 450頁
- 沖縄県教育委員会編. 1993. 『沖縄の文化財 天然記念物編』 沖縄県教育委員会 66頁
- 在沖多良間郷友会編. 1977. 『ふるさと 在沖多良間郷友会20周年記念誌』 在沖多良間郷友会 137～138頁
- 多良間村誌編纂委員会編. 1973. 『村誌たらま島 孤島の民俗と歴史』 多良間村誌編纂委員会

多良間村史編集委員会編．1993．『多良間村史第四
巻資料編3（民俗）』 多良間村史編集委員会
131頁

名嘉真宜勝．1999．『沖縄の人生儀礼と墓』 沖縄
文化社 57頁

新納義馬．1983．「多良間島の抱護林」『沖縄大百
科事典 中』 沖縄タイムス社 730頁



写真 1



写真 2

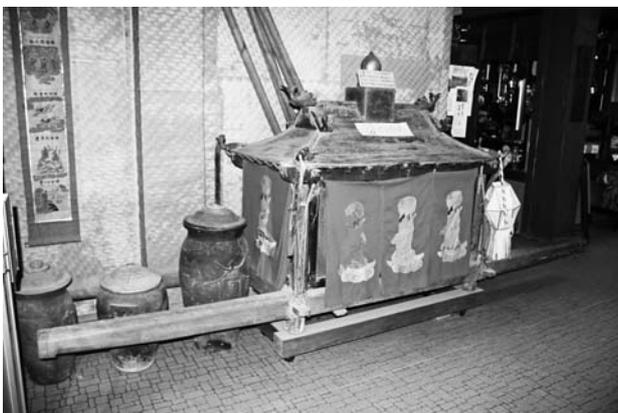


写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真11



写真 9



写真12



写真10

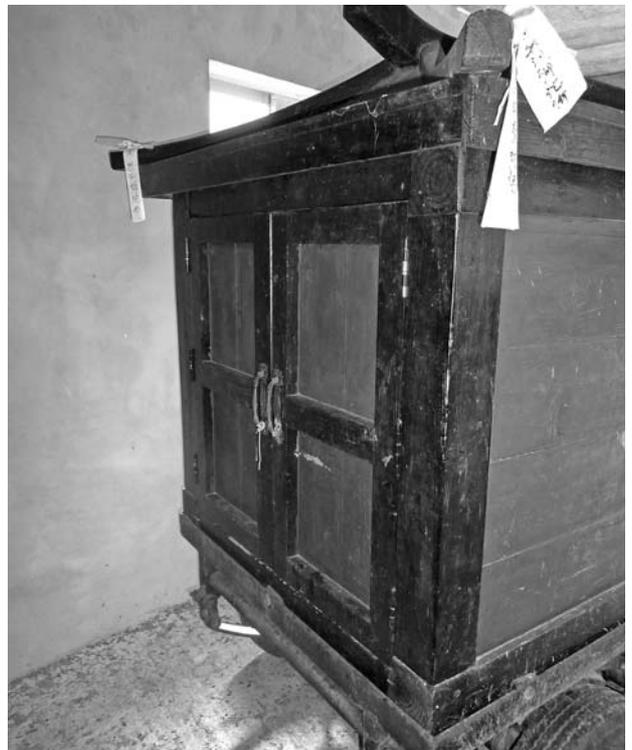


写真13



写真14



写真15

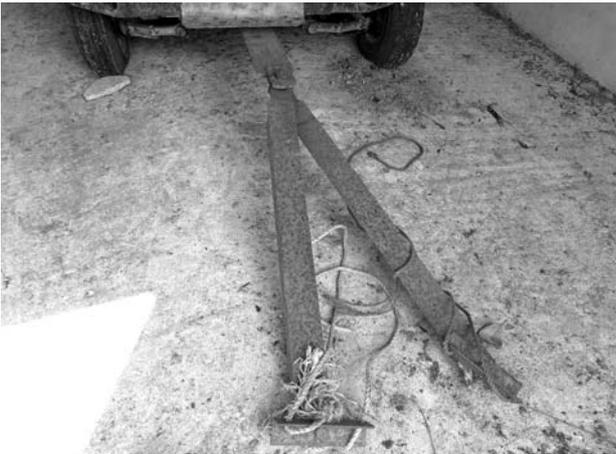


写真16